

【加子母の経木】存続の意義と可能性を探る

森と木のクリエイター科 木工専攻 浅野 由佳梨

第1章 研究の背景と目的

1.1 研究の背景

経木とは、生の木材を薄く削ったものであり、現代では主に食品の包装や料理の敷物（懐敷）、折箱（弁当箱）、経木塔婆（仏具）など、使い切りの用途として用いられている。材料の樹種としては、スギ、アカマツ、シナノキなどが挙げられる。本研究においては主に食品向けの経木を扱う。

筆者が経木に関心を持ったのは、アカデミー入学前のオープンキャンパスで中津川市加子母地域の最後の経木職人である桂川荘平（かつらがわそうへい）氏の話を目にしたことにある。桂川氏は1958年から、駅弁用の折箱生産に始まり、長きに渡り経木を生産されてきた。

本研究では、桂川氏が加子母地域で生産してきた経木を便宜的に【加子母の経木】と呼ぶ。加子母の経木の特徴は、特注の機械によって他地域に比べ、薄いものから厚いものまで削れるという点である。主にスギ、他にヒノキ、アカマツ、ホオノキなど、東濃地域の良質な材が用いられていた点も挙げられる。

しかし24年11月に桂川氏が怪我をきっかけに引退され、その後施設に入所されたことから、直接お会いすることが困難となった。桂川氏の下には後継者もおらず、【加子母の経木】は終わりを迎えようとしていた。

桂川氏のもとで生産現場や技術を見学した際に、素材の特性や歴史、一見して至極シンプルな木の生活用品でありながら、そこには多くの技が詰まっている点に魅力を感じた。それらが同氏の引退によって「このまま消滅してしまうのはもったいない」という強い問題意識を抱いたことが、本研究に取り組む直接のきっかけであった。



桂川荘平氏



経木

1.2 研究の目的

上記の問題意識のもと、筆者自身が将来的に経木生産に関わる事を見据えつつ、【加子母の経木】が今後どのような形で存続し得るのかを検討すべく課題研究として取り組むこととし、本研究の目的を次の2点に定めた。

1：【加子母の経木】を存続させる「意義」を探る。需要の有無や評価、経木の特性や文化的観点から、現

代社会において経木が持つ価値を再確認する。

2：【加子母の経木】を存続させる「可能性」を探る。調査結果を踏まえ、どのような形であれば存続の可能性はあるのか、そのあり方を検討する。

第2章 存続の「意義」を探る

2.1 需要面の調査

2.1.1 対面の聞き取り・アンケート調査

需要の把握を目的とし、経木の流通や使用実態を把握するため、卸先やユーザーへの対面での聞き取りとアンケート調査を行った。件数は次の通り。

聞き取り：8件

アンケート：6件／食品関係5件、工芸関係1件

2.1.2 聞き取り・アンケート調査から得たこと

調査を経て、経木の需要は単なる包装材としてではなく、複数の効用・価値によって支えられていることが明らかとなった。

スギの懐敷：料理の敷物として用いられるスギの懐敷は、見た目の美しさに加え、香りが料理の風味を損なわず、むしろ引き立てる点が評価されていた。

茶道の菓子皿：木工家の川合優氏は「杉を桂川氏ほど美しく突ける人はいない」と語り、作品制作の材料として加子母の経木を使用している。経木は消耗品でありながら、素材そのものの美しさや質感が評価され、茶道具としての菓子皿など、表現性を求められる場面でも用いられてきた。

食パンの調湿・抗菌材：長野県のパン製造業者では、パンとともにアカマツの経木をビニール袋に入れることでカビの発生が抑えられた経験から、現在は食パンの袋に経木を1枚ずつ入れて販売している。経木が持つ調湿性や抗菌性が、食品の保存性を高める素材として実用的に機能している事例である。

シウマイ弁当：シウマイ弁当で知られる崎陽軒からは経木が水分調節をし美味しさを保つことに加え、「原料となる木材や経木の生産者、加工業者が減少する中でも、今後も昔ながらの駅弁文化を守っていくため、経木の折を継続して使用していきたい」との回答が得られた。経木は機能面だけでなく、駅弁の包装としての在り方を長年にわたり支えてきた素材であることがうかがえる。

伊勢名物の餅：伊勢市の名物であるへんば餅を販売するへんばや商店においても、40年ほど前から経木が包装材として用いられている。伊勢ならではの土地の雰囲気にも調和する素材として評価されてきた。

以上の事例から、経木は用途や場面に応じて、見た目の演出性、機能性、文化的背景といった複数の価値を併せ持つ素材であることがわかる。同用途の紙製包装資材と比較すると単価は高いものの、アンケートでは価格が上昇した場合でも使用を継続したいとする回答がほぼ全てを占めており、一定の需要が存在することも確認された。これらの点から、加子母の経木を存続させる意義は、需要面からも認められる。

2.2 供給面の調査

2.2.1 生産者数の変遷と経木生産の今

昭和41年の全国経木製造者名簿によると、当時は全国で713軒であった経木生産者数が、出典は異なるが令和6年の総務省統計局 経済構造実態調査では35軒となっており、58年間でおよそ95%減少していることが推測される。

本研究では中部地方を中心に5軒の経木生産者を訪問し、聞き取り調査を行った。岐阜県内の生産者からは、生産者数の減少を背景に注文が集中し、多忙な状況にあること、またそれにより売り手市場の傾向が見られることが語られた。これらの点から、経木生産は供給面での不足があるとわかった。

2.2.2 経木を供給する意義

長野県の(株)やまとわに話を聞く中で、経木生産には以下のような意義があることを学んだ。

- ・経木という使い切りの製品を、生産地や周辺の地域で適切に伐採された材を継続的に用い、素材の特性を見極めながら製品化することは、森林の健全な代謝を促し、山の手入れを支える一要素となる。

- ・同様の紙製品と比較すると、経木も使い切りの製品であるが、製造工程には大きな違いがある。紙製品が木材をパルプ化し、薬品や大量の水を用いた工程、乾燥など複数の工程を経て製造されるのに対し、経木は木材をそのまま薄く削り、乾燥するという単純な工程によって製品化される。このため経木は紙製品よりも省エネルギー、省資源的な素材である。

以上のことから、経木の供給は、環境的な視点でも優れたものであり、その供給の意義が認められた。

第3章 存続の「可能性」を探る

3.1 自ら継承する方法

3.1.1 桂川氏からの技術継承

当初は桂川氏から直接技術を継承することを検討していたものの、同氏が施設に入所され、現在は直接お会いして教を乞うことが出来ない状況となった。このことから桂川氏からの直接的な技術継承は断念せざるを得なかった。

3.1.2 (株)やまとわでのインターンシップ

実践的に経木生産の一連の流れを把握するため、(株)やまとわにて約2週間のインターンシップを行った。木取り、削り、乾燥、製品化に至るまでの全工程を実際に経験した結果、経木生産は工程ごとの判断や調整が品質に大きく影響する高度な作業であることが改めて明らかとなった。

ここまで調査と実践をしてきた結果、一人で直ちに事業化させ担い手となるのは現状困難であると判断した。技術・知識の習得に時間がかかる点、資金的な問題が特に大きなネックとなっている。ただこの実践を

経て、仕事の流れ、必要な技術、設備などに関しては具体的なイメージが持てたことに加え、各地の生産者の方々との繋がりを得られたことは大きな収穫となった。

3.2 地域で継承する方法

3.2.1 既存事業者との連携可能性

就職活動の一環として訪問した七宗町のある木工会社において、自身の取り組みについて説明したところ、高い関心を寄せていただいた。特に、インバウンド向けの商品展開や、地域資源・伝統文化を生かした事業としての可能性について言及があり、経木生産を同社の事業の一部として取り組む可能性についてもお話をいただいた。

3.2.2 協力者との関係構築

加子母や近隣の地域において協力者を探すため、加子母森林組合や商工会を通じてご紹介いただいた方を訪問した。付知町の木工家からは、桂川氏との長年の関わりや自身の経験に基づく材料選定・製法に関する助言を受け、今後も技術面で協力を得られることとなった。他にも地域内の木材利用に関する知識や経験を有する方や移住の場合の住まいの紹介を申し出て頂いた方などと出会い、単独ではなく、周囲の知見や協力を借りながら進める余地があることが確認された。

3.2.3 直近の状況

地域での継承の可能性を探るにあたり、まず桂川氏の親族に対し、使用されていた機械および工場の貸借について打診を行っている。現在は返答を待っている段階であるが、これまでに複数回のやり取りを通じ、筆者の加子母の経木を残していきたいという想いを伝えてきた。

そんな中、大変残念なことに桂川さんは1月13日に逝去された。このことを受け、設備が意図しない形で処分される事態を避けるため親族との協議を深めている。

3.2.4 小括

以上の結果から、【加子母の経木】を単独の担い手が引き継ぐ形には多くの困難が伴う一方で、筆者が中心的な役割を担いながら「地域としての継承」、つまり筆者が加子母の近隣に就職し、事業の一部として経木を生産するか、他の木工事業者と協業する、という形において存続の可能性が示された。

第4章 考察とまとめ

本研究により【加子母の経木】は、需要面において演出性、機能性、文化的背景といった価値が確認され、同時に供給の不足や、環境的視点での優位性から、存続の意義が認められた。また、個人で直ちに継承することは困難であるものの、地域や既存事業者と連携する形での継承によって、存続の可能性が見出された。

今後の課題としては、具体的な生産体制の整理や技術・知識の習得などが挙げられる。筆者自身は卒業後、まずは別の木工の仕事をしながらも周りの方の協力を得ながら経木づくりに挑戦し、加子母の経木を残していけるように尽力したい。